

会員だより

Members Letter

■追悼—ジェーン・ジェイコブズ



ジェーン・ジェイコブズ女史が亡くなった。4月25日朝(カナダ現地時間)、居住地トロントの病院で静かに息を引き取ったという。89歳という高齢でもあり、自然死に近い状態だったと報じられている。ついに一度も学術機関等の定職に就くことはなく、最後まで市井のフリーランスライターとして生涯を終えた。

都市計画分野では、『アメリカ大都市の死と生』(鹿島出版会)が圧倒的に知られている。自然発生的な都市の活気、多様性、安全性をこれほど見事に語った著作は他に類を見ない。その後は、『——死と生』でもその片鱗が見られる都市の「経済」により論点の重心を移し、70歳を超えてからも4冊の著書を発表している。旺盛な著述意欲には本当に恐れ入るしかない。

しかしながら、筆者がトロントのご自宅で2度お会いしたご本人は、しばしば著作で見せる刺激的な論調から想像される人物像とは異なり、鷹揚な笑顔としなやかな物腰のご婦人であった。異国から来た駆け出しの一研究者とその妻を暖かく迎えて下さり、手作りのクッキーまで頂戴した。対談の話題は、彼女の著作の内容をはじめとして様々な事柄に及んだが、その中でも特に、我が国の都市や経済に対する理解と評価が印象深い。多くの賞賛は、日本人として気恥ずかしいほどでもあったが、自らの足下を見つめ直すきっかけとなる貴重な体験だった。

知人の話によれば、亡くなる数ヶ月前まで執筆活動を続けていたという。あと2冊書くつもりで、出版社とも約束があったとのこと。興味は尽きない。だが、今はただご冥福をお祈りするばかり。残念である。

玉川 英則(首都大学東京 正会員)